

第二百六十三話 戦艦大和とは何だったのか？

日本人は、いまなお戦艦大和に言い知れぬ郷愁を感じている。「大和」なる言葉への共感、無敵の不沈戦艦と信じられ、帝国海軍のシンボルでありながら、海上特攻で撃沈した悲劇の戦艦であるが故に、我等の琴線に触れるのだろう。大和を語る時、心がざわつく。美しも悲しい話だ。それに魅せられる心情は理解し得る。

1 戦艦大和の概要

戦艦として史上最大の排水量(基準64000トン)に史上最大の46cm主砲3基9門を備え、乗員は最終時3300人、最大速力27.46ノット、航続距離13334kmであった。防御面でも、指揮系統の集中する重要区画(バイタルパート)では対46cm砲防御を施した戦艦であった。設計はもちろん、ブロック工法の採用など施工においても当時の日本の最高の技術



が駆使された。開戦直後の1941年(昭和16年)12月16日に就役。1942年(昭和17年)2月12日に連合艦隊旗艦。美しさは別格とも。

2 戦歴

- ・1941/6 ミッドウェー作戦が初陣
- ・1943年末 輸送作戦中にアメリカの潜水艦の雷撃で小破
- ・1944/6 渾作戦、マリアナ沖海戦に参加
- ・1944/10 捷一号作戦(レイテ沖海戦)
- ・1945/4/7 海上特攻、坊ノ岬沖で、撃沈された。

3 大和の戦果と被攻撃状況

大和の戦果：「戦闘詳報：撃墜3機、撃破20機」「米軍：6機が墜落、5機が帰還後に破棄、47機が被弾」

米軍の戦果報告と日本側の被弾数に差異

日本側：魚雷命中10発、12発、14発等

米側：魚雷10本、爆弾5発、魚雷30-35本、爆弾38発が命中、魚雷13-14本確実、爆弾5発確実等の論。

4 悲しき現実

- ・大和出撃の報は察知され、米軍は迎撃準備
- ・戦艦大和は空母機動部隊に追従し得ず
- ・金食い虫：莫大な建造費(国家予算の4.3%)と大喰らい(重油の消費量大)
- ・戦艦の廃艦検討と大和：末期に、軍港防空艦化、されど大和は特攻運用
- ・護衛なき作戦、壊滅必至の沖縄特攻
- ・片道燃料の真偽 実際は往復分はあったとも。
- ・天皇の大和の運用適当や否やの下問に対し、「適切ナリトハ称シ難カルベシ」と
- ・海軍の作戦に如何ほど寄与したか？「大和ホテル」と揶揄
- ・他に有効な運用法はなかったのか？温存の弊は、積極投入なしは何故か？
帝国海軍のシンボルが傷つく訳にはいかなかった？
- ・主砲の射撃は戦争間一回のみとか。(サマール沖海戦1944/10/25)その戦果は？
- ・極厚の装甲も魚雷には無力 片舷のみに魚雷攻撃 受く。
- ・坊ノ沖海戦の日米の被害比較
日本：戦艦、軽巡、駆逐艦(6/10隻)、(人員 大和：2740人、生存者は269名)
米側：航空機10機、12人
- ・昭和の三大バカ査定とかの悪口云う者あり。
- ・環境変化に対応できずに滅んだ恐竜を彷彿させる。

(了)